

○副議長（小林信） 午前に引き続き一般質問を行います。3番 齊藤鉄子君、発言を許します。3番、齊藤鉄子君。

（3番 齊藤鉄子議員 一般質問席登壇）

○3番（齊藤鉄子） 私は農業政策について質問いたします。

政府は5年後を目途に生産調整を廃止することを決め、今まで経営安定対策交付金として10アール当たり1万5,000円を支払っていたのを、来年度は半額の7,500円とすることに決めました。また、来年度の秋田県の実績は今年よりも3%増でJAの情報によりますと、村ではおよそ8.6haほど減反が増えるようでありました。

そして政府は、主食用米から需要が見込める飼料米などへと作付け誘導を進めるようでありました。農業の大規模化を進め、経営効率を高める狙いだと思えますが、村の現状を見ますと農地を集積しても効果は限定的で生産コストを下げるのは難しいと思えます。

飼料用米へと転換しても収量で補助金の変動するため、条件不利地域では、受給額が下がる可能性があります。村の実情をとらえ、村にあった農業政策をする必要があると思えますが、村長、如何でしょうか。ご答弁願います。

○副議長（小林信） はい、答弁を許します。村長。

（中田吉穂村長 登壇）

○村長（中田吉穂） 齊藤議員の農業政策に関係するご質問でございます。村の実情をとらえ、村にあった農業政策をする必要があると思うが、如何かということでもあります。ということは、齊藤議員は保護政策をとりなさいということのように、私は解釈をいたします。と言いますのは国の政策はもう農家の人方は十分ご承知のことかなと思えます。新聞、それから農協等の説明、またこれから予想されますTPPの問題等があるわけですけれども、条件が村の場合大変大規模化に適していないということで、コストダウンが難しいということだと思います。その件につきましては、十分私もわかってはおりますけれども、では、その保護政策を村独自でやって、それで農業が生き残って、この地域の若者にやる気が出てくるのかと。当然、保護政策をやるということは、そういう若い次の世代の方々がやる気を起こしてくるという確信のもとでなければ、私は簡単にはいかないだろうと、もう国、県もある程度米は自由化の方向に向いていると思っております。

JA関係は反対をしてきましたし、私もいろんな大会で、それはこの地域には実際合わない、農地がもたないし、後継者も育たないということ、何度も集会で話をしてきましたし、その点には変わりはありません。ただ、米に依存してきたというのは秋田県の特徴であると思えますし、他の地域でできるのに秋田県だけが、これができないというのであれば、これもまたおかしな

現象になりはしないのかなど。山間地域というのは、日本全国たくさんあるわけですが、本当に米づくりに適した地域というのはどのくらいあるのか。私が新潟の十日町周辺に行ったときも、この我々の地域よりもっと不便な地域で米作りが行われておりました。そういった地域では、どのようにこれから先考えているのか、そういった山間地域の米作りの考え方も参考にしていかなければいけないのではないのかなど思っております。

今、私の手元にある資料によりますと、300ha ですか、村で今実際に耕作している面積というのは、その半分は約 10 人の個人と、1 つの法人が担っておるわけですね。あとの 150ha 近くが零細な農家の人がやっているという状況にあるかと思えます。まず、半分の 150ha 営んでいる専業農家と申しますか、そういう大規模な 10ha 以上をやっている農家は、今また規模拡大に多分いろんな方からお願いをされてきていると思えます。村に上がってくる資料を見ますと、全てがそういう地域の中核になる農家の個人経営の方々に耕作をお願いしているという状況にあると思っております。

ですから、そういう方々を支援していったらいいのか、それとも、今現実に消えようとしている半分の零細農家の人も救わなければいけないのか、このへんはまだまだ先がどういうふうか、農家の人が自分の事業を展開しているのかも私にはまだ読めません。そういった点で支援するにしても大変厳しいのかな。ただ、今の農業政策をみてみますと条件の不利なところは耕作放棄地になっていくのかなど、そういう心配が危惧されておりますので、そういった心配を、この地域の村としてそれを放置していてもいいのか。これにはやはり地域の生きてきた、暮らしてきた、そしてまた景観としても守ってきたこともあるし、そして、災害防止とかいろんな面で生物の生態系、いろんな面でこれは村としても守っていかなければいけない、そういう貴重な田畑であると思っておりますので、そうした耕作放棄地が、もしこの中核になる農家から漏れてきた場合、それを村としては何んとしていくかと、集落の方々と相談をしながら、生産コストを度外視した若者の雇用の場とか、そういったものも考えていく必要もあるのかなど。まだまだ考え方としては、固定はできないわけですが、地域を守っていくそういった考え方の中で発想をそういった地域を守ることにつなげていかなければどうかと。それが、例えば夏場は農業であり、冬場は林業であるとか、そういった形で連携をとって後継者育成という形も兼ね合わせながらやっていこうと、行けばどうかと今考えている最中でございます。

そういった意味において本当に農業政策が今難しい状況になってきていると思えますし、大規模を考えても 50 町歩、100 町歩の農家がこの村で誕生するとは思われません。そういった面で大変農業をやっていく上で厳しい時代に入っ

ていると思っております。

齊藤議員は、農業委員会の会長でもありますし、農業政策は多分いろんな面では、資料は私よりも若しかしたら多く持っていると思います。ただ、そういう資料をいくら読んで、この地域が農業で暮らしが成り立つというふうにはなっていないと思うのです。後継者も育つと、それは大規模農家、それから米作りに適している地域が政治力と絡んでいると、私はそう思っております。そうした面で、こうした不利地域が政治の世界からも段々忘れ去れて行くのかなと、本当に腹立たしいような思いをもっておりますけれども、でも、負けるわけにはいかないし、地域をなくすわけにもいかないわけです。ですから、そこには雇用対策とか、いろんなことを考えながら村としてのやるべき道があるのではないのかなと、そこを一生懸命探り当てながら農業政策にも光を当てていきたいと考えております。

大変はっきりとした答弁にはならないわけですがけれども、いずれ、今すぐに農業政策が変わるという状況でもありませんけれども、でも今年度からある程度じわじわと、真綿で締められるようなそういう農業政策が、この地域にもくるのだなということは、私も考えておりますし、身にしみておりますので、そのために、本当はそういう施策をしていくためには、農業法人になっていただきたいのです。いろんな集落営農というのがあるわけですがけれども、本来であればもう集落営農から農業法人に変わっていなければいけなかったのです。でも、村の場合は1農業法人しか成り立っていないし、あとは集落営農という形でなかなか進んでいかないと。個人にお金を投入するというのは村としてもなかなか難しいと、そういう法人化した中でやればなど、そうすればいろんな方法もまた見えてくると思うのですけれども、そこらへんは農家の方々がどういう将来を、自分方の将来を考えているのかなということも、こちらの方で把握しなければなかなかできないのかなと。そういう答弁しかできませんけれども、もし再質問があればお答えしたいと思います。

○副議長（小林信） はい、齊藤鉄子君。

○3番（齊藤鉄子） 後継者対策についても、いうことを忘れてしまいまして、後継者対策についての、村としての考え方も、村長には答弁していただきました。ありがとうございます。

後継者は少ないのですけれども、20代、30代の後継者もおります。今後の集落の維持、さきほど村長の答弁にありましたけれども、私もそう思います。集落の維持、村の維持のためにも絶対必要です。大事に育てつなげる必要があると思います。若者が意欲を持って就農する環境づくりが必要と思うのですが、それで今ご答弁いただきましたが、夏場は農業、冬場は林業というのもよいのではないかという、そういうのもひとつの対策だとは思いますが、それで、ご答

弁の中で保護政策をとりなさいということかということをおっしゃいました。実際に来年度主食用米の1万5,000円が半額になりますと、実際に2,200万円ほど村としては収入が減ります。これは農協の資料でございます。5年後、いざれどうなるかわかりませんが、減反の補助金が廃止になりますと、本年度25年度で主食用米、飼料用米、米粉用米、加工用米、大豆、そば、飼料作物に対しての補助金が6,800万円ほど、村には入っております。それが今度5年後全然入らなくなるということはないと思いますけれども、そういう金額が村に入ってなくなります。そういった場合に村としては、農家の収入も減るわけですので、またそれに見合った別の保護政策があるかもしれませんけれども、村としては、そういう実情を見据えて今後の対策をとる必要があるのではないかなど、私はそう思うのですが。もちろん、TPP問題もでございます。まだ年内妥結は難しいということで、年明けに交渉がまた再開するということでありましたが、村長は自由化に向いているのではないかということでありました。でも、そうなりますと本当にこの中山間地域、平場のそういう都市近郊の農村は生き残っていけるかもしれません、この中山間地域は、地域の存亡が難しくなってくるのではないかなど、そう思います。

そういったことで、村として今からそういう農業振興政策と言いますか、そういうのを考えていかなければならないのではないかなどと思います。村長のお考えをお伺いいたします。

○副議長（小林信） はい、村長。

（中田吉穂村長 登壇）

○村長（中田吉穂） 村として、将来を見据えた振興策が必要でないかという再質問でございます。

もちろん、将来を見据えていかなければいけないということは、全ての事業についても言えることだと思います。農業だけでなく林業もそうでありまして、そのことについては当然そのような気持ちはよくわかります。ただ、今の農業政策がはたしてどういう方向に向って行くのか。そしてまた、それで決着になっていくのか。日本の農業が、今、国がやろうとしているところに全て落ちつくのか、ということを見ましてもまだまだ私は簡単には落ちつかないのではないかなど、こう考えられます。

つまり、農業政策もひとつの国がひとつの政策だけではなくて、当然中山間地域をどういうふうに、国の農政が担っていくのか。私は、これは農政局にも、前にもお話をしてきましたし、当然大潟村の農業と上小阿仁村の農業は違うのですよと、国はそういう違いのあるところをどうして一緒くたにしてやろうとするのかと、そこをもう少し細分化した、我々はこの地域を守るという、そういう大きな目標も掲げておるといこともお話をしておりますし、そういった

意味でまた米作り以外に野菜とか、そういったものでこの地域の農業が方向転換しながら上向いていくということも、私は考えられなくもないなと思います。

ある四国の取り組みでありましたけれども、銀行を退職した方と土建屋の方が、ふたりで農業をやったと、その時に畑をやったわけですけども、作物は全て2倍で売ると、2倍以上でなければ売らないのだと、それは化学肥料を一切使わない、畜産の肥料も使わない、産業廃棄物は使わない。そして使うのは雑草を肥料化して使うのだと、こういう目的をもってそしてできたものを都会へきちっと売り込むという形で単価を高くして農業に参入していく。つまり農家と違う新しい考え方の人方の取り組みを、今新たに取り入れていく必要があるのではないのかなと。今農業をやっている農家のことを聞けば前に進めなくなってしまう。どうしてもいろんな愚痴が出てきてしまうということで、やはり新しい取り組みをやっている人方の声を聞きながら、我々はそれを自分たちにあったところに、合うように考え方をこなしながら合うようなシステムをつくり上げていくというのも大切ではないのかなと思います。

ただ、村として今までの減反政策のその金額というのは少しばかりの金額ではありませんので、簡単に村として支援できるかと。何千万円も支援できるかといえ、これもまたなかなか厳しさがあるのではないのかなと思っております。いずれにせよ農家の方々の大変なことも理解できますし、ただ、それに対して、はい、差上げますよということも、これもまたすぐに答弁できる問題ではないと思います。また周りの市町村関係、いろんな面の情報入れながら、皆さんの農家の方々のやる気を失わないような、そういう農業政策を村としても考え、検討してまいりたいと思っておりますので、ご理解のほど、よろしく願いをいたします。

○副議長（小林信） はい、齊藤鉄子君。

○3番（齊藤鉄子） 前向きなご答弁どうもありがとうございます。

農家はどうしてもJAといいますか、それが売りどころにみたいになっております。ですので、村の方とJAの方とより密に話し合いをしながら農業政策を進めていただければありがたいなと思っております。

1つ目の質問はこれで終わらせていただきます。

2つ目の質問でございます。KAMIKOANIプロジェクトについて質問いたします。先ほど長井議員も質問していただきましたが、長井議員みたいに高度な質問はできないのですけれども、昨年につき開催されたプロジェクトは開催期間を少し長くしておりましたが、昨年よりも3,000人ほど多い入場者があり、村自体のPRや、また来年度秋田県で開催される国民文化祭のPRにもつながり、広く村外へ情報を発信することができたのは、大変喜ばしいことだと思っております。

私も八木沢で週末に行われたカフェの方に少しお手伝いをさせていただきましたが、訪れた人たちは、交流する中でまた引き続き来たいなど、県外からの人たちもたくさんいらっしゃいました。プロジェクトをきっかけとして、もっと村外の人たちを村に足を運んでもらうなどの具体的な対策、村外の方たち、村民の人たちの交流だけでなく、村外の人たちをもっと何回も足を運んで貰うなどの具体的な対策があるのか、そういうお考えがあるのかお尋ねいたします。

費用対効果としては、さっき村長が子供たちを地域の伝統芸能に目を向けさせるきっかけとなったと、それはすごくいいことだとおっしゃいました。ですがこれをきっかけとして村外の人たちにもっと何回も足を運んでもらうような、そういう対策があればいいのではないかなと思います。お考えをお聞かせ願います。

○副議長（小林信） はい、村長。

（中田吉穂村長 登壇）

○村長（中田吉穂） KAMIKOANIプロジェクトについてのご質問でございます。

終ってみれば、昨年度より少し訪れた人方が、3,000人ほど多かったということで、本当にやってよかったなと思っております。このプロジェクト、いろんな意味合いがございまして、まず、上小阿仁村をよく知ってもらうと、上小阿仁村の地名をあげていくのだから、まず目的のひとつでもありますし、それによって訪れる方々の声に耳を傾け、そして村のよさ、そういったものを我々が発見していくのだと、再認識していくのだという取り組みのもとにこれが行われております。

ですから、子供たちが伝統芸能やそういったものに真正面に取り組んでくれるのも、これも本当にありがたいことだと思っております。議員のお考えはもっともっと村にせつかく1回、2回と足を運んで来てくれるのだから、何回も来てもらえるような取り組みができないかというお話でございますし、提案であろうかと思えます。もちろんそういった何回も何回も好きな人であれば足は運んでくれると思います。ただ、芸術といいますか、アート作品は期間で、今のところは期間以外には置けないということになっておりますので、今後の取り組みとしては、来年度は何かして毎年1点でも2点でも村に置けるようなそういう取り組みも追加していきたいと、そうすれば、また普段訪れても見ることもできるという気持ちもしております。ですから、我々はやっぱり1回目やって、2回目やって、そしていろんな反省点が出てきました。その中から少しずつ改善をしていければなと思っております。

昨年、応援隊の水原君の母校であります武蔵野大学からも学生方が来て、こ

のプロジェクトを手伝ってくれました。それから、協力隊の方々も、そしてまた地域応援隊の方々も、このプロジェクトがあるということで、大変期待をし、自分方のやる気のある場面も出てくると、働きの場も出てくるし、上小阿仁村の情報提供も、自分たちがやるんだという、そういうすごい意気込みも感じておりますし、そうした応援をいただきながら、このプロジェクトが進められてきているということで、私は大変いい方向にいているなど思っております。

ただ、経済的な面はもっともっとやっぱり村の人方がアピールできるものを出してもらいたいなど、行政がまさか何かを作って売るというわけにもいかないのではないのかなど。沖田面小学校の時も、ここにちょっと机があってコーヒーなんか飲んで、そして山吹まんじゅうでも、いなり寿司でも、そういったものをここで売ればなというふうなレジスタンスの先生方のお話もありました。京都であればこんな真似はしないよと、お客さんが来れば、京都は観光地だからただでは帰さないのだよと、そういう地域性があるというお話も承っております。ただ、私が言われても行政がやりなさいよと、でもすぐそこに店があるのだから、店がきて商売のチャンスがあると、店の中において待つよりも、外へ出ればもっと人がきているのに売れるチャンスがあるのになど、私もそういう考えをもちました。ただ、それを村で買ってきて売るということになれば手数料が発生しますし、いろいろな制約も出てきます。そういった意味で商売をやっている人方がチャンスを見つけて、それに取り組んでいくという姿勢も、私は大事でないのかなど思っております。

行政が何から何まで係わりをもってやるということは、かえって地域のやる気をなくするということにもなりかねないと考えております。

まず、新しい取り組みとして、さらに普段でも上小阿仁プロジェクトに来て見て貰えるような、新年度の取り組みを考えておりますので、そのような形で頑張っていきたいなど思っております。

台湾の姉妹都市、そういったところからのアーティストの招へい、招くということも考えておりますし、できれば公募作品も何点かは置きたいなども考えております。ただ、これが村独自、村だけで何でも進められるかと言えば、なかなかそうもいかないわけでごさいます、秋田県の方とそれから美術大学と、この三者で協議が必要となっております。そういった意味で三者が手を結んで、来年度、26年度実行できるような、そういう体制づくりをしていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○副議長（小林信） はい、齊藤鉄子君。

○3番（齊藤鉄子） ご答弁ありがとうございます。

私は、このプロジェクト、八木沢のをきっかけとして、その期間中だけでなく、それをきっかけとして来てくれた人たち、村でいろんな行事のあるごと

に、来ていただくような機会を作ればいいのではないかとということで質問したのですけれども、というのは、議員研修で四国の高知の馬路村に行って来ました。そこは人口1,000人たらずの村でございまして、森林率が96%で、うちの方の村と同じようなところでした。そこでも活性化に不可欠ものとして交流人口の拡大をあげておりました。そして、観光で村を訪れる人々、村を応援し、村で生産された商品を買ってくれる全国の応援者、村の特別村民制度に登録して、ともに地域づくりを行う特別村民、そういったのを設けて、一生懸命頑張っていたらっしゃいました。もちろんあそこの地域は、ゆずという特別な物があります。ですが、我が村としても何か村で取れたもの、例えばペイナスにしても、食用ホオズキにしても、いろんなものがあります。そういったものを定期的に届けるような、そういったものでもいいでしょうし、せっかく村がよくて何回も来てくださるといことですので、そういう人たちを逃さない。何回も来てもらような運動会でもいいだろうし、そういうイベントをことあるごとに開いて、そうすれば村の村民もそのために村外の人たちと交流して活性化していくといいですか、そういうのが必要ではないかなと思って質問したわけです。そういったところはどうかでしょうか。もちろん協力隊の人たち、すごく頑張ってくださいっております。学生さんたちとも実際ふれあったりしました。そういった人たちが口コミで上小阿仁村はこんなにいいところだったよと、楽しいところだったよと言ってお話してくだされば、全国に上小阿仁村のよさをもっともっと発進することができると思います。せっかく上小阿仁村に来たとしても、何にもない、村の独自のそういった取り組みが何にもないとなれば、せっかくのそういういいイメージが壊れると思います。何かそういったお考えがないのか、よろしく願いいたします。村長のお考えをお聞かせください。

○副議長（小林信） はい、村長。

（中田吉穂村長 登壇）

○村長（中田吉穂） 馬路村、去年ですか、議員の方々が四国の方へ、今年ですか、議員研修にいかれて、新鮮で大変新しい情報だなと思って、私はこの件は知っておりました。ということは1,200人の住民、そのほかに1,000人の応援住民というのがいると、それは雑誌でもみておりますし、そしてまた、これは多分議員の人方が聞いてきたかなと思うのは、結婚に関する取り組みもすばらしい取り組みをやっています。

住民の若い人方、村内の若者と、それから村外の女性と2泊3日村費で交流すると、そういう取り組みもやっていて、もう11組が結婚し、17人の子どもまで生まれていると、そういう取り組みをやっているのを私は知っております。つまり情報はいろんなところから入れることができるわけです。ですから、もちろん、八木沢でいろんな取り組みをやってきたけれども、なかなかその続き

がないと、単発だということで何かもつとないかと。もちろんそこに来て今度は何かやれるものがあればいいわけです。そこを皆で知恵を出さなければ、例えば、では八木沢で運動会をやるかと、昔の運動会やるかと、来た人方に案内状出してみようか、何人来るかなと。秋には賞品は大根やるとか、畑の物を賞品に作るとか、付けるとか、なにかしら、そういう取り組みをやりながらレポーターを作っていくという感じもいいのかと、私は飛躍すればどんどんそういう考えは浮かぶのですけれども、ただ、実際にやるとなればなかなか難しいけれども、どこまで、どういう人に案内を出していくのかなと。上小阿仁村では運動会もないし、集落回りをしても大変寂しいと、皆でやるものがなくなってきたと。そういう訴えも、今回、集落を回りながら聞いておりますし、集落めぐりをしますと……、主題からはずれてきましたが、そういった心配の面もあります。齊藤議員がおっしゃるように次の手というのを、行政も一生懸命考えているわけですが、なかなか行政のいい案が出てきません。はっきり言って行政の方からは。ですから、いろんなところへ研修に歩かされている皆さん方の、こういうところではこういう取り組みをやってあったよと、村ではこういう取り組みできないかということも提案してくれれば、我々もそれに応じて一生懸命前向きな取り組みにかえていきたいなと思っております。

ただ単にアートで地域へ人を呼べばそれであと終わりという取り組みでは終りたくはない。私もできればこれをひとつの契機として定住に結び付けられるような村のよさを売り込みたいと。そしてそういったものが空き家対策にもなったり、地域の雇用の場になったり、いろんなことに波及できるのではないのかなと、ひとつひとつ取り組みをやっていくしかないのではないのかなと考えておりますので、どうかいい案、皆さんの考えなど聞かせてもらって、ともに考えてやっていきたいと思っておりますので、どうかよろしく願いいたします。

○副議長（小林信） 齊藤鉄子議員、再々質問ありますか。

○3番（齊藤鉄子） あと終ります。私はイベントをやる場合に八木沢にこだわらなくても人が集まりやすい、道の駅周辺でやるとか、そういったのでもいいと思います。ですが村長もそういったお考えだとのことで、一生懸命手を取り合って、村の繁栄のために頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

これで終ります。ありがとうございました。

○副議長（小林信） これで一般質問を終ります。